

本土決戦準備

昭和20年

4月1日 内地防衛のため動員を下令せらる

編成第1日は4月10日とす

4月3日 国境警備常盤隊の第6中隊及び第2機関銃中隊の1小隊を復帰す

4月4日 国境警備太刀花隊に配属中の第2中隊及び第1機関銃中隊1小隊を復帰す

保管馬全部を逐次満州第808部隊に交付す

4月5日 本日を以て一応動員業務を終了す

4月7日 部隊は3梯団に別れ輸送を実施す

梯団区分及び出発日時左の如し

第1梯団 I i A (-RiA) TL(-Ⅹ 2分) 甲 4月9日0640

第2梯団 長 久保田少佐

II (-1/3/6) RiA BiA/III Ⅹ1分

4月10日0640

第3梯団 長 中山大尉

III (-BiA) 1/3 6 Ⅹ1分

4月16日 0640

4月14日 第1梯団 1200釜山到着 西面廠舎に廠営す

4月15日 第2梯団 1200釜山到着

4月16日 第1第2梯団0700日向丸にて釜山出度1600博多港到着

17日 博多に上陸、博多市に舎営す

19日～20日 博多出発

4月21日 第3梯団1500釜山到着

20日～21日 徳島到着、徳島市に舎営す

23日 連隊は住吉村、堀江村、應神村に分散舎営し訓練に邁進す

28日 忠魂社御霊を歩兵第112連隊補充隊に奉遷す

30日 第3梯団第16多聞丸にて釜山出度

5月2日 第3梯団敦賀に上陸、西国民学校で舎営す

1～2日 第1第2梯団は13個梯団に分かれ高知平野に転進

第1大隊(第1中隊欠)は須崎付近に主力は後免付近に駐留す

9～10日 第3梯団到着後免町付近に駐留す

師団は第55軍に属し拘束兵団として仁淀川口より物部川口に渉る間に堅固に陣地を占領し火力と肉攻力とにより敵を陣前及び陣内に於いて撃滅す

連隊(第1大隊(第1中隊欠)欠)は、左地区隊となり第3大隊(連隊砲1ヶ小隊(1ヶ分隊欠)速射砲中隊(1ヶ小隊欠)第9中隊(1ヶ小隊欠)欠)を以て岡豊山周辺の高地帯を第2大隊(連隊砲中隊(1ヶ小隊欠)速射砲1ヶ小隊属)は一部を以て比江山、主力を以て左右山西村北側及び領石南方高地を第9中隊(1ヶ小隊欠)連隊砲1ヶ小隊属)は坂折山の各々拠点式に堅

固に占領し敵を陣前に於いて撃滅す

第1中隊は連隊の予備隊とす

第1大隊は師団直轄の須崎支隊なり須崎湾に上陸する敵に対し多くの郷付近を堅固に占領し之を撃滅に努めやむを得ざるも高知平野に向かう北進を阻止するに決す

連隊本部を国分寺に置き部隊は夫々陣地付近に宿営し築城材料を収集し坑道陣地の築城に着手す

6月5日 噴進砲中隊を編成す

6月10日 師団は戦闘計画を変更し水際撃滅に決す

連隊は第3大隊(連隊砲中隊(1ヶ小隊欠)属)を以て片山岡の上及び其の西方高地付近及び坂折山を第2大隊(速射砲中隊(1ヶ小隊欠)連隊砲1ヶ小隊属、第5中隊の1ヶ小隊及び機関銃1ヶ分隊欠)を以て本村、藤宮、高見、高田、田井大桶付近の村落及び水田地帯の水際部隊として速射砲1ヶ小隊、第5中隊の1ヶ小隊第2機関銃の1ヶ分隊、第3機関銃の1ヶ分隊を以て濱改田水際地帯を夫々堅固に占領し敵を水際及び陣前に於いて撃滅するに決す。

本陣地は水田及び村落よりなる平地其の主力を占め然も飛行場に接続し特に第2大隊方面は1つの高地丘陵もなく防御には極めて困難なる地形なり。

工事は先ず棲息掩蔽部から実施し平地は「コンクリート」作業を主とせるも水田地帯なれば湧水極めて多く降雨の度に土崩れありて工事困難を極めたるも不屈の勇を振るい障害を克服し工事を概成せり。

この間、連隊本部の大篠国民学校に置き部隊は陣地付近に宿営す。須崎支隊も水際撃滅の主旨に基づき古城山、琴平山付近に進出し新たに築城を実施す

7月8日 突撃兵団たる安芸兵団の進出に伴い土佐湾正面の平地帯を之に守れり。

連隊(第1大隊欠)は突撃隊となり敵上陸後其の態勢の整はざるに乘じ琴平山若しくは其の北方高地より濱改田丘陵に添いて濱改田に突撃之を水際に撃滅するに決し第3大隊(連隊砲1ヶ小隊、速射砲中隊(1ヶ小隊欠)属)を以て第1線突撃隊となし神風山周辺高地帯を占領し棲息所並びに攻撃築城を実施し第2大隊を以て第2突撃隊となし鮎森西方高地帯に棲息所を構築せしめ水際陣地へ兵力を1ヶ小隊増加し第5中隊(1ヶ小隊欠)第2機関銃中隊の2ヶ分隊、速射砲1ヶ小隊となす連隊は本部を稲生国民学校に置き各隊は兵舎を夫々遮蔽せる山腹山谷に建て攻撃築城に邁進するとともに寸暇を惜しみて戦闘計画に基づく攻撃法、発煙、実弾射撃等を演練し更に戦場緊要なる特業教育に精励し必勝の確信を得つつあり。

8月14日 突如として停戦の御詔書煥発せられ正に晴天の霹靂天を仰ぎて慟哭す
必勝の信念、完勝の築城あるを如何せん大詔必謹書類を焼却し軍需品全

- てを処理す
- 8月18日 9時30分命により鮎森北方約400メートル聖旗山頂に於いて謹みて軍旗を奉焼す
師団長、参謀長、連隊長、大・中隊長、本部付き諸官、独立小隊長参集し部隊は夫々現在地に於いて奉送す
皇国の再建を誓いこの痛恨を胸に刻す
- 8月31日 香川臨時憲兵第1大隊付きを命ず
- 9月10日 7時30分より須崎国民学校に於いて左記により須崎支隊の復員式を実施す
- 9月11日 13時より高知県長岡郡三和村濱改田汀線に於いて師団長大野中将臨席の下敵艦の掃海作業を眼前に見つつ左記により歩兵第12連隊の復員式を挙行す
於茲軍旗親授より71年数々の戦役に武勲を樹て先輩の血によりて築きたる伝統を有する無敵歩兵第12歩兵連隊も全く事実上の解散となりたり

軍 旗 奉 焼

時期：昭和二十年八月十八日時刻は午前九時三十分

場所：高知県長岡郡稲生村鮎森北方四〇〇米の高地

奉 送 の 辞

謹みて按ずるに明治八年九月讃州丸亀の地に歩兵第十二連隊編成なるや九月九日畏くも宮中に於て明治天皇より軍旗を親授せられ「歩兵第十二連隊編成なるを告ぐ。仍って今軍旗一旒を授く汝軍人等協力同心して益々威武を宣揚し以て国家を保護せよ」との勅語を賜う。

爾来年を閲すること七十一年西南の役を始めとして日清、日露、満洲守備、西伯利亚、上海、支部の各征戦に従い軍旗の向う所摩かざるなく特に日露戦役に於ては大孤山の戦闘。上海事変に際しては月浦鎮、羅店鎮の戦闘に於て感状を授与せられ赫々の武勲を樹て克く無敵連隊の名を海内に知らしめ軍旗の光、愈々輝かしきを加え以て明勅に対へ奉れり。

此の間聖旗の下に身を捧げし英霊は故陸軍中佐椿武忠の命、以下三千式百参十四柱に達せり。今次大東亜戦争に際しては満洲宝東の地区に駐りて北辺鎮護に任し軍旗の御威光を以て克くソ連の野望を封殺せり。今春戦局急迫すると共に本土決戦に参加を命ぜられ、軍旗南進して土佐の地に翻る。爾来今日迄築城に力を注ぎ戦技を練り身爆一体、一人一殺の烈々たる斗魂を燃し必勝を確信して敵の采冠に備えたり。

何ぞ計らん。

停戦の命、突如として下る。

嗚呼事遂に茲に到り万事休す。吾等尚奉するに軍旗あり。何ぞ屈せん。然れども大命は厳たり。吾等血涙を振って茲に軍旗を奉焼せんとす。七十年の伝統を顧み思いを先輩戦闘の跡に馳するとき再び惜恨の涙滂沱として尽くる所を知らず。吾等の軍旗既になし。され

ど其の聖魂は吾等が胸奥に深く宿りて尚座するが如く。団結は更に強せられたり。

伏して庶幾くは聖旗永へに神鎮まりて皇国の前途を見行ひ給わらんことを。

茲に第三十三代連隊長原田喜代蔵 謹而 軍旗を焼き奉るに際し恭しく奉送の辞を捧ぐ。

昭和二十年八月十八日

歩兵第十二連隊長 原田 喜代蔵